

## 論文

# 愛知大学名古屋校舎 2010 年度入学生の英語力の推移

—TOEICクラスの運営を中心に—

石原 知英

## 要 旨

本稿は本学名古屋校舎 2010 年度入学生の英語力の推移を記述することを目的とし、入学時の TOEIC クラス編成テスト (TOEIC Bridge テスト：2010 年 4 月)、春学期期末試験 (S 教科書付録 Half TOEIC テスト：2010 年 7 月)、秋学期期末試験 (TOEIC IP テスト：2011 年 1 月) の 3 回のスコアについて、学部学科別および履修クラス別の 2 つの側面から分析した。分析結果から、今後の TOEIC クラス運営への示唆として、(1) 現行の 4 レベルによる区分を多少修正する必要があること、(2) 回帰係数を用いた未受験者のクラス編成が可能であること、(3) 入学生の英語力の経年変化や学習者の到達度を測定するために、今後も継続的に TOEIC テストの受験を課す必要があること、(4) カリキュラムおよび到達目標について再考する必要があること、の 4 点を指摘した。

キーワード：愛知大学名古屋校舎 1 年生、英語力、測定、TOEIC、TOEIC Bridge

## 1. 本学名古屋校舎 2010 年度の英語科目カリキュラム

### 1.1 概況

2010 年度の本学名古屋校舎では、法学部、経営学部 (経営学科・会計ファイナンス学科)、現代中国学部 に所属する 3 学部 4 コースの学生が、法学部・経営学部 (法営) カリキュラ

ムと現代中国学部（現中）カリキュラムに分かれて、様々な英語科目を履修している。

法営の英語科目カリキュラムでは、1年次の「論説英文講読 I/II」と「TOEIC I/II」（I：春学期，II：秋学期），2年次の「論説英文講読 III/IV」（III：春学期，IV：秋学期）の計6単位が必修科目として設定されている。「論説英文講読」では、主にその後に履修する専門科目「外書講読」や「専門演習」などの科目への橋渡しのためのリーディング力の強化を、「TOEIC」では、英語によるコミュニケーション能力の育成とともに、就職活動をも視野に入れたスコア向上を、それぞれ主眼としており、どちらも法営両学部の学生が混在する35～40名程度のクラス編成となっている。「論説英文講読」は習熟度別ではなく、教科書や進度、試験、評価などが各担当者の裁量に任されている。「TOEIC」は習熟度別のクラス編成で、後述するような共通性のあるカリキュラムとなっている。

現中の英語科目カリキュラムでは、1年次の「TOEIC I/II」（I：春学期，II：秋学期）と3年次の「論説英文講読 I/II」（I：春学期，II：秋学期）の計4単位が必修科目として設定されている。それぞれの科目の目標は上述した通りであるが、これらのクラスは現代中国学部の学生のみで編成されている。加えて専門科目として、「英語リスニング」（2年次秋学期必修）、「実用オフィス英語 I/II」（選択）が開講されている。

これらの科目に加え、3学部共通の選択科目として、2年次以降は「コミュニケーション英語」、「メディア英語」、「表現英語」、「英文小説講読」、「TOEIC III」を、3年次以降は「英語演習」を履修することができる。選択科目はそれぞれ異なる曜日時限で2クラス以上が開講されており、少人数でのきめ細かな指導がなされている。

## 1.2 「TOEIC」クラスの位置づけと実施体制

「TOEIC」クラスでは、主として英語によるコミュニケーション能力の育成と、就職活動を見据えたスコアの向上（TOEIC I：450点レベル，TOEIC II：520点レベル，TOEIC III：620点レベル）を目標とし、個々の習熟度や目標に合わせた取り組みが可能となるよう、習熟度別のクラス編成を行っている。

2010年度の1年次春学期のクラス編成は、入学式直後に実施したTOEIC Bridgeテストのスコアを用いて行い、各クラスの人数が概ね均等になるように、法営を18クラス（クラス名：01～18）に、現中を4クラス（クラス名：21～24）に、それぞれ編成した。これらの計22クラスを、これまでの指導経験をもとに表1に示される4レベルとして捉え、各レベルで統一の教科書を採用した。

## 愛知大学名古屋校舎 2010 年度入学生の英語力の推移

表1 クラス編成と使用教材

レベル	法営	現中	教材
1	01, 02, 03, 04		教科書K
2	05, 06, 07, 08, 09, 10	21, 22	教科書S
3	11, 12, 13, 14, 15, 16, 17	23, 24	教科書A
4	18		プリント教材

「TOEIC」は学期末試験を共通試験としている。春学期の期末試験は、授業に用いていない教科書付録の Half TOEIC テスト（後述）を、出版社との契約により実施した。成績評価は、期末試験である Half TOEIC テストのスコアを 50%、クラスごとの平常点を 50% とし、両者を合算した。平常点の算定方法やクラス運営について（たとえば進度や小テストの実施など）は担当者の裁量に任された。

秋学期は、学生の伸びを考慮し、Half TOEIC テストのスコアを基にクラスを再編成した。なお、テスト未受験者は専任教員担当コマを中心に配置するため、01, 18 クラスの学生は同じクラスへ、それ以外は 16, 17 クラス（法営）と 23 クラス（現中）に割り振った。教科書は春学期のクラス対応と同様としたため、場合によっては（たとえば 08 クラスから 03 クラスに変更になるなど）、新しく教科書を購入する必要のある学生が見られたが、そうした学生には、教科書の解答を配布するなどして対応した。

秋学期の期末試験は、共通試験として TOEIC IP 試験を実施した。成績評価は、期末試験（TOEIC IP 試験）を 50%、クラスごとの平常点を 50% とし、両者を合算した。春学期と同様、平常点の算定方法やクラス運営などは担当者の裁量に任された。

### 1.3 TOEIC テストについて

TOEIC テストとは、Educational Testing Service (ETS) により開発・制作された、英語によるコミュニケーション能力を幅広く評価するための試験である（国際ビジネスコミュニケーション協会, n.d.a）。テストの構成は、リスニングセクション 100 問、リーディングセクション 100 問の計 200 問（実施時間は 120 分）であり、その結果は 10 点から 990 点までの 5 点刻みで評価される。前田（2005）も指摘するように、このテストは非常に広範なレベルの学習者の英語能力を測定することができる一方で、特に習熟度の低い学習者にとっては、理解可能な項目が少ない中で集中力を持続させる必要があり、測定の正確さに対する危険性も考慮する必要がある。

こうした点を踏まえ、ETS は 2001 年度から、TOEIC Bridge テストを実施している。このテストは主に初・中級レベルの英語能力測定に照準を合わせて設計されており、近年で

は中学校や高等学校などにも導入され始めている（国際ビジネスコミュニケーション協会, n.d.b）。テストはリスニングセクション50問, リーディングセクション50問の合計100問で構成され, 実施時間は60分である。TOEICテストに比べリスニングセクションの出題スピードが遅く, 話題や素材がより日常的であるなどの工夫がなされており, 受験への負担が少ないと考えられる。なおTOEIC Bridgeテストのスコアは10点から180点までの2点刻みで評価される。

本学名古屋校舎では, 学生の習熟度や実施のための費用などを勘案し, 2010年度春学期のクラス編成テストとしてTOEIC Bridgeテストを採用した。

春学期期末試験(かつ秋学期のクラス編成試験)として用いたのは、「Half TOEICテスト」である。このテストはETSによる公式なTOEICテストではなく, S出版社の教科書Xに収録されているTOEIC対策のための模擬試験である。出版社との契約により, 期末試験として利用することができた。このテストはTOEICを模した形式で, リスニングセクション50問, リーディングセクション50問の計100問で構成され, 実施時間は60分であった。スコアは単純に1問1点として100点満点で算出した。

秋学期期末試験として採用したTOEIC IPテストは, TOEICテストの団体受験特別制度(IP: Institutional Program)であり, 実施日時を自由に設定できるという利点がある。テストの構成や実施時間, スコアなどは先述したTOEICテストと同様である。

本稿では, 2010年度にTOEICクラスのカリキュラムの中で実施した上記3つのテスト(TOEIC Bridgeテスト, Half TOEICテスト, TOEIC IPテスト)について, それぞれの学部別, クラス別のスコア分布を記述するとともに, スコアの推移についても可能な限り分析する。また, それらを解釈し, 今後のTOEICクラス運営についての示唆をまとめる。

## 2. テストスコアの分析

### 2.1 TOEIC Bridgeテスト(春学期クラス編成試験)

2010年4月に実施したTOEIC Bridgeテストのスコアを以下に示す。

まず, 学部・学科別のTOEIC Bridgeテスト合計点の平均値について, その差を分散分析により検討した。その結果,  $F(3, 996) = 12.98, p < .001, \eta^2 = .04$  であり, 学部・学科間の平均値の差は有意であった。チューキーのHSD法による多重比較の結果, 法 > 経営(経営)  $\geq$  現中 > 経営(会計) (>は有意水準5%で有意な差,  $\geq$ は有意でない差)となった。

愛知大学名古屋校舎 2010 年度入学生の英語力の推移

表2 学部・学科別の TOEIC Bridge テストスコア

	全体 ( <i>N</i> = 1000)		法 ( <i>n</i> = 381)		経営 (経営) ( <i>n</i> = 298)		経営 (会計) ( <i>n</i> = 140)		現代中国 ( <i>n</i> = 181)	
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
	合計	127.2	17.9	130.9	16.8	126.5	16.9	120.5	18.2	125.6
L	63.4	8.3	64.6	8.1	63.0	7.6	60.8	7.9	63.4	9.5
R	63.8	11.2	66.3	10.3	63.5	10.9	59.7	11.8	62.2	11.9

注. TOEIC Bridge テストは合計180点 (L : 90点, R : 90点) 満点である

表3 クラス別の TOEIC Bridge テストスコア

	01 ( <i>n</i> = 46)		02 ( <i>n</i> = 46)		03 ( <i>n</i> = 46)		04 ( <i>n</i> = 46)		05 ( <i>n</i> = 46)		06 ( <i>n</i> = 46)	
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
合計	157.7 <sub>a</sub>	5.3	149.7 <sub>b</sub>	1.6	145.6 <sub>c</sub>	1.3	142.3 <sub>d</sub>	0.7	139.8 <sub>de</sub>	0.6	137.6 <sub>ef</sub>	0.8
L	76.8	4.6	73.3	3.1	70.4	3.4	70.2	3.2	69.3	3.4	66.5	3.1
R	80.9	4.1	76.4	3.4	75.1	3.8	72.1	3.3	70.5	3.4	71.1	3.0
	07 ( <i>n</i> = 46)		08 ( <i>n</i> = 47)		09 ( <i>n</i> = 47)		10 ( <i>n</i> = 47)		11 ( <i>n</i> = 46)		12 ( <i>n</i> = 45)	
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
合計	135.7 <sub>fg</sub>	0.8	133.2 <sub>gh</sub>	1.0	130.9 <sub>hi</sub>	1.0	128.5 <sub>i</sub>	0.9	125.4 <sub>j</sub>	0.9	122.4 <sub>k</sub>	0.9
L	65.3	3.3	65.4	3.8	63.6	4.3	63.1	3.3	62.2	4.2	60.4	3.8
R	70.3	3.5	67.8	4.0	67.3	4.2	65.4	3.1	63.2	4.3	62.0	4.0
	13 ( <i>n</i> = 45)		14 ( <i>n</i> = 45)		15 ( <i>n</i> = 45)		16 ( <i>n</i> = 43)		17 ( <i>n</i> = 46)		18 ( <i>n</i> = 42)	
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
合計	118.9 <sub>l</sub>	1.0	115.1 <sub>m</sub>	1.2	110.6 <sub>n</sub>	2.0	105.3 <sub>o</sub>	1.8	100.0 <sub>p</sub>	1.6	90.1 <sub>q</sub>	8.0
L	59.2	3.9	58.5	3.4	56.7	4.0	55.2	3.9	53.5	3.0	48.3	5.3
R	59.6	4.1	56.6	3.6	53.9	4.2	50.1	3.7	46.4	3.6	41.8	6.4
	21 ( <i>n</i> = 47)		22 ( <i>n</i> = 45)		23 ( <i>n</i> = 44)		24 ( <i>n</i> = 45)					
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>				
合計	148.6 <sub>b</sub>	7.2	134.6 <sub>g</sub>	3.5	118.8 <sub>l</sub>	4.8	99.3 <sub>p</sub>	10.1				
L	74.0	5.7	66.5	4.5	60.0	4.8	52.6	5.8				
R	74.7	5.1	68.1	4.1	58.8	5.6	46.7	6.4				

注. 同じ下付文字の付いた値はテューキーのHSD法による多重比較で  $p > .05$  の差である

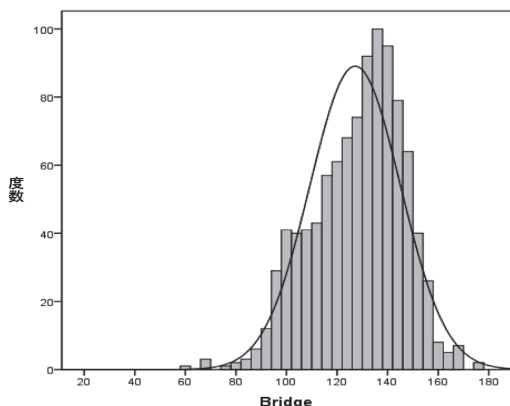


図1 TOEIC Bridge テストスコアの分布

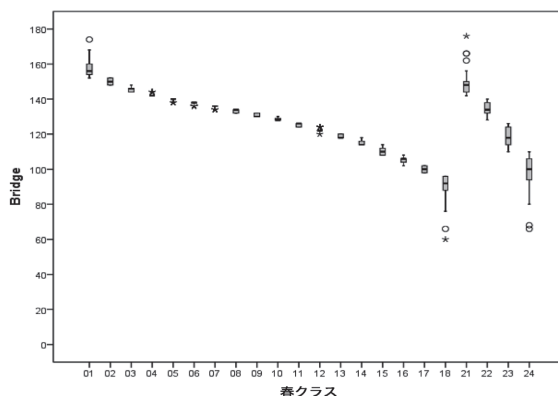


図2 クラス別の TOEIC Bridge テストスコア

同様に、クラス間における TOEIC Bridge テスト合計点の平均値についても、その差を分散分析により検討した。その結果、 $F(21, 978) = 1076.38, p < .001, \eta^2 = .96$  であり、クラス間の平均値の差は有意であった。多重比較の結果は表中に示した。

この図表から、01～13 クラスと 21, 22 クラスでは、リーディングセクション (R) の平均点がリスニングセクション (L) の平均点を一貫して上回っており、逆に 14～18 クラスと 23, 24 クラスでは、L の平均点が R の平均点を上回っていることが分かる。この点は各クラスでの指導においても参考となるであろう。

加えてこの結果から、TOEIC Bridge テストは本学入学生のクラス編成試験として課すテストとして非常に効果的であったといえよう。本学入学生の英語力を全国的に比較したり、就職活動に向けてのスコア向上を目指すという点では、入学時点から TOEIC テストを導入することも考えられるが、後述する TOEIC IP テストの結果をみても、特に英語を苦手とする学生のスコアにフロア効果が見られ、クラス編成が難しくなる可能性がある。また、ETS が TOEIC Bridge テストの対象者として考えている TOEIC 450 点以下の受験者という条件に合致する学生も多く、適切な難易度で取り組みやすいテストであったと考えられる。

## 2.2 Half TOEIC テスト (春学期末試験・秋学期クラス編成試験)

2010 年 7 月に実施した Half TOEIC テストのスコアを以下に示す。

まず、学部・学科別の Half TOEIC テスト合計点の平均値について、その差を分散分析により検討した。その結果、 $F(3, 979) = 18.30, p < .001, \eta^2 = .04$  であり、学部・学科間の平均値の差は有意であった。テューキーの HSD 法による多重比較の結果、法 > 経営

愛知大学名古屋校舎 2010 年度入学生の英語力の推移

(経営)  $\geq$  現中  $\geq$  経営(会計) (ただし経営(経営)と経営(会計)の間には有意差あり) となった。

同様に、クラス間における Half TOEIC テスト合計点の平均値についても、その差を分散分析により検討した。その結果、 $F(21, 961) = 89.61, p < .001, \eta^2 = .66$  であり、クラス間の平均値の差は有意であった。多重比較の結果は表中に示した。

表4 学部・学科別の Half TOEIC テストスコア

	全体 ( $N = 983$ )		法 ( $n = 375$ )		経営(経営) ( $n = 292$ )		経営(会計) ( $n = 138$ )		現代中国 ( $n = 178$ )	
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
合計	48.1	10.5	50.8	10.4	47.9	9.7	44.5	10.2	45.5	11.0
L	23.9	5.9	25.1	6.0	23.6	5.5	22.3	5.8	23.1	6.3
R	24.2	5.9	25.7	5.9	24.3	5.7	22.2	5.5	22.4	5.8

注. Half TOEIC テストは合計100点 (L: 50点, R: 50点) 満点である

表5 クラス別の Half TOEIC テストスコア

	01 ( $n = 43$ )		02 ( $n = 46$ )		03 ( $n = 46$ )		04 ( $n = 45$ )		05 ( $n = 46$ )		06 ( $n = 45$ )	
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
合計	63.7 <sub>a</sub>	5.1	59.1 <sub>a</sub>	5.7	57.1 <sub>bc</sub>	6.0	56.6 <sub>bc</sub>	6.0	55.0 <sub>bcd</sub>	6.1	54.7 <sub>bcd</sub>	5.9
L	31.6	3.7	29.8	3.5	27.9	3.8	28.7	4.5	27.3	3.9	26.7	4.2
R	32.1	3.4	29.3	3.8	29.2	4.4	27.9	4.2	27.7	4.2	28.0	4.0
	07 ( $n = 45$ )		08 ( $n = 47$ )		09 ( $n = 45$ )		10 ( $n = 46$ )		11 ( $n = 46$ )		12 ( $n = 44$ )	
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
合計	52.5 <sub>cde</sub>	7.4	50.7 <sub>de</sub>	6.7	49.5 <sub>ef</sub>	5.1	49.0 <sub>ef</sub>	6.4	48.6 <sub>ef</sub>	6.3	45.2 <sub>fg</sub>	6.9
L	26.4	4.4	24.9	4.9	24.6	4.0	28.8	3.9	24.2	4.2	22.0	4.6
R	26.1	5.0	25.9	4.2	24.9	4.2	25.2	4.5	24.4	4.0	23.2	4.6
	13 ( $n = 45$ )		14 ( $n = 44$ )		15 ( $n = 43$ )		16 ( $n = 45$ )		17 ( $n = 45$ )		18 ( $n = 39$ )	
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
合計	43.8 <sub>gh</sub>	6.8	42.0 <sub>gh</sub>	6.3	39.7 <sub>hi</sub>	5.9	39.7 <sub>hi</sub>	6.4	35.8 <sub>ij</sub>	5.9	30.2 <sub>k</sub>	4.4
L	21.2	4.1	20.4	4.1	19.7	4.1	19.9	4.3	18.1	4.0	14.9	2.9
R	22.5	3.9	21.6	4.7	20.0	3.6	19.8	4.4	17.8	3.6	15.3	3.3
	21 ( $n = 45$ )		22 ( $n = 45$ )		23 ( $n = 43$ )		24 ( $n = 45$ )					
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>				
合計	57.7 <sub>b</sub>	6.9	48.8 <sub>ef</sub>	5.9	41.2 <sub>gh</sub>	7.2	34.0 <sub>jk</sub>	5.8				
L	30.0	5.1	24.6	4.0	20.7	3.4	17.0	3.4				
R	27.8	3.4	24.2	4.1	20.5	4.9	17.0	4.2				

注. 同じ下付文字の付いた値はテューキーのHSD法による多重比較で  $p > .05$  の差である

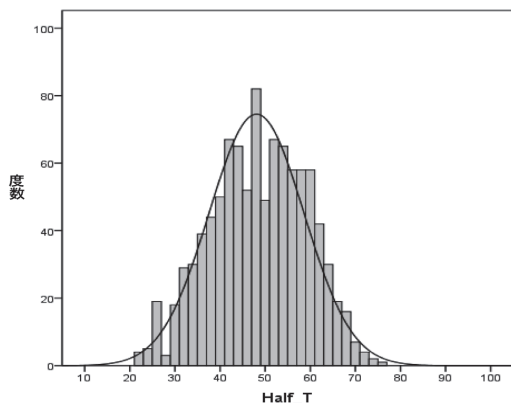


図3 Half TOEIC テストスコアの分布

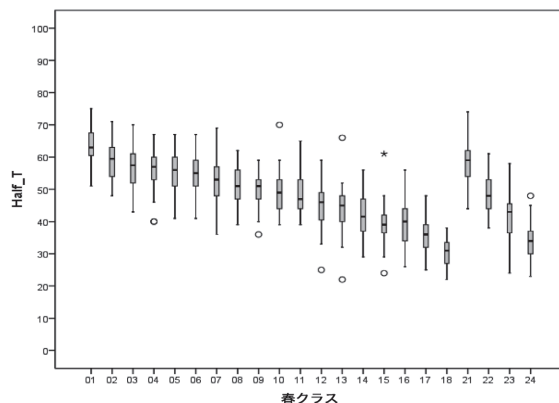


図4 クラス別の Half TOEIC テストスコア

当然のことながら、クラスごとのばらつきがTOEIC Bridge テストに比べて大きくなっている。その最大の要因は、半年間の指導や本人の努力によりスコアを伸ばした学生が出てくることであろう。その一方で、特に図4において下方の外れ値となっている学生については、それぞれのクラスの進捗や難易度にうまく適応できず、スコアを伸ばせなかった可能性がある。

また、TOEIC Bridge テストではRとLの平均点についてクラス間で一貫した特徴があったが、Half TOEIC テストではその特徴はそれほど顕著ではない。この原因については、指導の効果による学生の伸びとテストの構成および採点方法によるものとを区別して判断することは難しい。

こうしてカリキュラムの中で統一試験を行い、ある程度一貫した成績評価を実施しようとする取り組みは、昨今しばしば議論されている、到達目標に準拠した大学教育のありかたを考える上で大切であろう<sup>1</sup>。ただ、TOEIC Bridge テストとHalf TOEIC テストの結果を比べても、学生の個々の伸びを検討することが難しく、そういう意味では、カリキュラムの点検および評価においてあまり意味のあるテストではないと言える。加えて、本学TOEIC科目の目標の1つとして就職活動にむけてのスコア向上を掲げていることを考えると、本来ならこの時点でTOEIC Bridge テストかTOEIC IP テストを課すことが望ましい。この点は、今後コストとの兼ね合いの中で検討していく必要があるだろう。

### 2.3 TOEIC IP テスト（秋学期期末試験）

2011年1月に実施したTOEIC IP テストのスコアを以下に示す。

まず、学部・学科別のTOEIC IP テスト合計点の平均値について、その差を分散分析に



愛知大学名古屋校舎 2010 年度入学生の英語力の推移

より検討した。その結果,  $F(3, 948) = 12.52, p < .001, \eta^2 = .04$  であり, 学部・学科間の平均値の差は有意であった。テューキーの HSD 法による多重比較の結果, 法 > 経営 (経営)  $\geq$  現中 > 経営 (会計) となった。

表 6 学部・学科別の TOEIC IP テストスコア

	全体 ( $N = 952$ )		法 ( $n = 360$ )		経営 (経営) ( $n = 284$ )		経営 (会計) ( $n = 132$ )		現代中国 ( $n = 176$ )	
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
	合計	353.8	98.7	374.5	105.3	349.4	87.5	316.5	82.3	346.5
L	203.9	56.9	214.1	58.3	201.0	51.5	184.3	51.4	202.5	61.6
R	149.9	50.8	160.4	55.6	148.4	46.5	132.2	39.9	144.0	49.8

注. TOEIC IP テストは合計 990 点 (L : 495 点, R : 495 点) 満点である

表 7 クラス別の TOEIC IP テストスコア

	01 ( $n = 46$ )		02 ( $n = 43$ )		03 ( $n = 43$ )		04 ( $n = 41$ )		05 ( $n = 43$ )		06 ( $n = 44$ )	
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
合計	528.6 <sub>a</sub>	96.2	468.7 <sub>b</sub>	65.1	446.2 <sub>bc</sub>	65.0	399.6 <sub>cde</sub>	64.4	417.2 <sub>cd</sub>	69.0	391.5 <sub>de</sub>	61.1
L	293.8	51.9	256.6	42.2	250.8	37.1	220.8	42.5	235.0	45.0	223.3	41.7
R	234.8	52.0	212.1	37.1	195.3	45.7	178.8	39.3	182.2	36.0	168.1	32.6
	07 ( $n = 44$ )		08 ( $n = 46$ )		09 ( $n = 43$ )		10 ( $n = 42$ )		11 ( $n = 45$ )		12 ( $n = 46$ )	
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
合計	373.1 <sub>def</sub>	58.3	365.8 <sub>efg</sub>	65.2	356.2 <sub>efgh</sub>	63.5	341.6 <sub>fg</sub>	58.1	312.7 <sub>hijk</sub>	58.1	324.5 <sub>ghij</sub>	69.4
L	216.7	38.6	200.8	39.7	208.5	41.8	198.0	41.5	184.9	40.0	191.2	46.2
R	156.4	31.4	165.0	40.0	147.7	32.0	143.6	36.1	127.8	30.4	133.3	34.0
	13 ( $n = 44$ )		14 ( $n = 43$ )		15 ( $n = 45$ )		16 ( $n = 41$ )		17 ( $n = 40$ )		18 ( $n = 38$ )	
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
合計	304.9 <sub>ijkl</sub>	47.9	304.4 <sub>ijkl</sub>	40.1	280.2 <sub>klm</sub>	57.3	275.0 <sub>klm</sub>	57.4	263.9 <sub>lmn</sub>	43.3	218.2 <sub>n</sub>	38.9
L	181.5	31.1	181.0	33.4	170.8	41.8	166.3	41.8	159.1	32.8	122.5	32.3
R	123.4	30.3	123.4	26.1	109.4	25.4	108.7	27.0	104.8	24.8	95.7	17.1
	21 ( $n = 45$ )		22 ( $n = 45$ )		23 ( $n = 41$ )		24 ( $n = 45$ )					
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>				
合計	466.8 <sub>b</sub>	88.8	358.0 <sub>efgh</sub>	55.3	310.6 <sub>hijkl</sub>	52.1	247.4 <sub>mn</sub>	53.9				
L	268.9	52.6	209.4	36.3	184.1	37.4	145.9	40.0				
R	197.9	47.2	148.6	37.0	126.5	26.7	101.6	22.0				

注. 同じ下付文字の付いた値はテューキーの HSD 法による多重比較で  $p > .05$  の差である

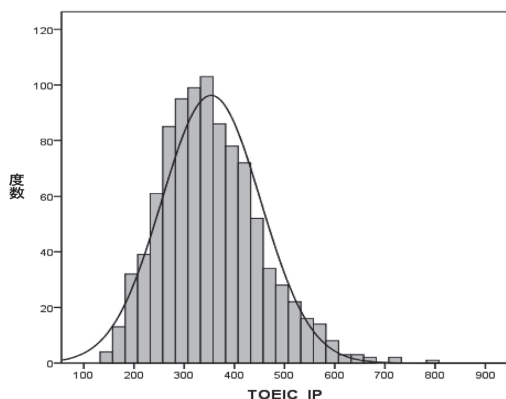


図5 TOEIC IP テストスコアの分布

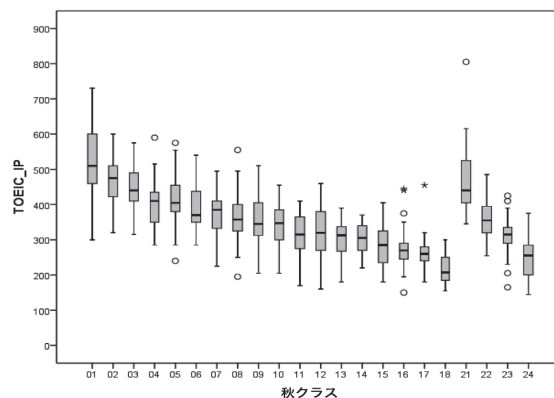


図6 クラス別の TOEIC IP テストスコア

同様に、クラス間における TOEIC IP テスト合計点の平均値についても、その差を分散分析により検討した。その結果、 $F(21, 930) = 69.93, p < .001, \eta^2 = .61$  であり、クラス間の平均値の差は有意であった。多重比較の結果は表中に示した。

TOEIC IP テストでは、TOEIC Bridge テストや Half TOEIC テストの結果と異なり、全クラスで一貫して L の平均点が R の平均点を上回った。TOEIC IP テストのリーディングでは、大量の英文を素早く処理する力やビジネス関連の語彙力が求められるが、こうした特徴が学生の R の平均点を押し下げているのではないかと考えられる。今後はこのあたりに特化した指導上の工夫を講じ、十分な力を養っていく必要があるだろう。

また、04-05 クラス間、11-12 クラス間で、平均点の逆転が起きている。この要因を特定するのも容易ではないが、その 1 つとして教科書の問題を指摘することができるだろう。冒頭で述べたように、本学名古屋校舎の TOEIC カリキュラムでは、法営 18 クラスと現中 4 クラスの計 22 クラスを 4 レベルに分け、それぞれのレベル内で統一の教科書を用いた指導を行っている。その結果、04 クラスは比較的難易度の高いレベル 1 の教科書を用いたのであるが、その教科書が当該クラスの学生にとって難しすぎ、効果的な指導に至らなかったのではないかと考えられる。一方 11 クラスではレベル 3 の教科書を用いたが、これは逆に学生にとって簡単すぎる内容であり、こちらも同様に、十分に効果的な指導がかなわなかった可能性がある。

このレベル分けと教科書については、現中の 4 クラスにおいても類似の問題を孕んでいる。2010 年度は現中の 4 クラスをレベル 2 と 3 に分類しているが、特に 21 クラスは、平均点でみると 02 クラス（ばらつきも考慮すると 01 クラス）に近い分布を示しており、現行レベルのレベル 2 の教科書ではなく、より難易度の高いレベル 1 の教科書を用いるほう

## 愛知大学名古屋校舎 2010 年度入学生の英語力の推移

が適切であったかもしれない。本来なら TOEIC Bridge によるクラス分け試験の後にレベルを設定し、教科書を選ぶことが望ましいのであるが、シラバスの公開や教科書の確保などの問題があり、現実的ではない。実際は前年度のデータを基に判断することになるため、来年度以降は本データを参考にしたレベル設定と教科書選定が必要であろう。

また、本学名古屋校舎の 1 年生の大半（約 80%）のスコアが、TOEIC II の到達目標として謳われている 520 点を下回ることが明らかとなった。この秋学期末試験が、多くの学生にとって初めての TOEIC 受験である点は考慮する必要があるが、本学の TOEIC 科目の到達目標との整合性を考えると、特に中位以下のクラスでの取り組みについては抜本的な改革が必要であろう。

### 2.4 経時的変化

最後に、上述した 3 回のテストスコアの推移を比較し、2010 年度入学生の英語力の推移について検討する。とはいえこれらのテストはすべて異なるため、単純な比較が難しい。そこで本稿では便宜的に、すべてのテストを TOEIC テスト（990 点満点）に換算して検討することにした。TOEIC Bridge テストは、国際コミュニケーションセンターによる換算表（表 8）を基に、それぞれの間のスコアについては均等に割りつけることで換算した（たとえば TOEIC Bridge テストが 152 点の場合、TOEIC テスト 480 点に換算した）。また、90 点以下および 160 点以上のスコアについては、信頼性のある換算ができない（国際ビジネスコミュニケーション協会、2006）ことから、便宜的に 88 点以下はすべて 220 点、162 点以上はすべて 600 点とした。Half TOEIC テストは、単純に 1 問 9.9 点として換算した。

表 8 TOEIC テストスコア換算表（国際ビジネスコミュニケーション協会、2006）

TOEIC Bridge	90	100	110	120	130	140	150	160
TOEIC	230	260	280	310	345	395	470	570

換算したスコアを用いた散布図を以下に示す。図 7 は TOEIC Bridge テストのスコアと Half TOEIC テストのスコアの間を、図 8 は Half TOEIC テストと TOEIC IP テストの間を、それぞれ示したものである。

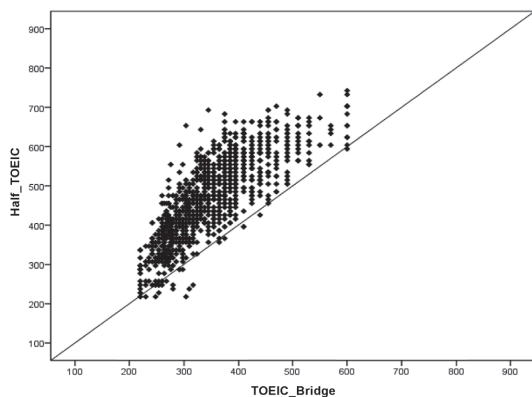


図7 春学期の伸び

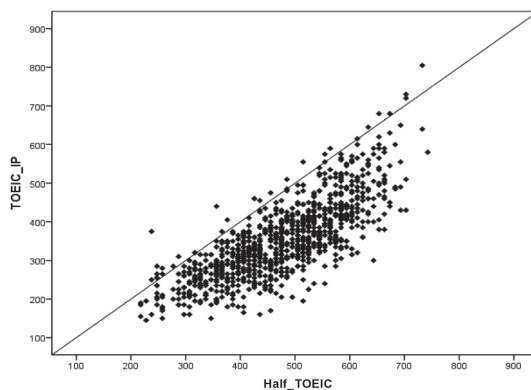


図8 秋学期の伸び

図中の直線は、それぞれのテストスコアの等値を結んだものである。そのため、本来この図からは、左上三角にプロットされた学生はスコアが伸びており、逆に右下三角にプロットされた学生はスコアが下がっていることが読み取れる。しかし、春学期の半年間はほとんどすべての学生のスコアが伸び、逆に秋学期にほぼ全ての学生のスコアが下がるとは考えにくい。むしろ、換算した Half TOEIC のスコアがやや甘く見積もられた可能性が高いと考えられる。

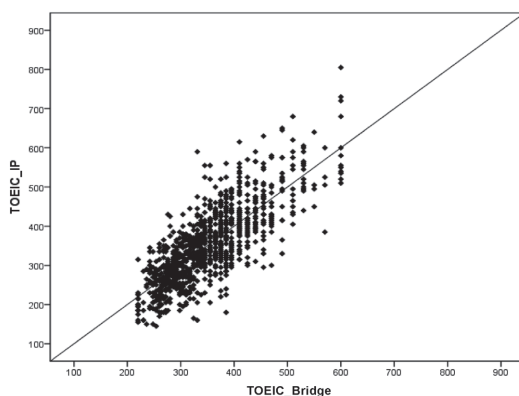


図9 1年間の伸び

同様に、1年間の伸びについて確認するため、入学時の TOEIC Bridge テストと秋学期終了後の TOEIC IP テストの散布図を図9に示した。この図からは、スコアが伸びていると考えられる学生がおよそ半数、同様に伸びていない（むしろ低下した）学生が半数存在することが読み取れる。この点については、指導の効果という点からも、早急に検討し対

応する必要がある。半数程度の学生のスコアが十分に伸びていない可能性の1つとして、TOEIC Bridge テストと TOEIC IP テストの間のギャップが考えられる。TOEIC IP テストでは、特にリスニング問題のスピードや語彙のレベル、あるいは問題数などの面で、TOEIC Bridge テストに比べて難易度が高い。そうした問題群に十分に対応しきれなかった学生が多かったと考えられる。なお、TOEIC Bridge テストの換算については、国際コミュニケーションセンターにより、あくまで目安であることと、90 点以下および 160 点以上のスコアについては信頼性のある換算ができないことが指摘されており、解釈にはこうした点も考慮する必要があるかもしれない。

### 3. おわりに

最後に本稿のまとめとして、分析結果から見えてきた課題を4点挙げ、今後の TOEIC クラス運営への示唆とする。

まず1点目として、レベルの設定と教科書について改善の余地があることが指摘できる。現行では4段階に分類し、それぞれのレベルごとに共通の教科書を採用している。こうした一貫性のあるカリキュラムは今後も継続していく意義があるが、今年度のデータを見る限り、クラスごとのレベル設定については多少の修正が必要である。設定するレベル数や教科書の選択などとの兼ね合いもあるが、2010年度のデータからは、例えば04クラスと11クラスはレベル2へ、21クラスはレベル1へ、それぞれ変更することが可能である。

2点目は、クラス編成テスト未受験者の扱いについてである。春学期のクラス編成テストはほぼ全ての学生が受験しているが、秋学期のクラス編成テストでは未受験者が十数人程度見られる。これは、春学期期末試験で秋学期クラス編成テストを兼ねているため、春学期 TOEIC クラスの出席不足の学生らが試験を受験しないためである。先述の通り、今回はこうした学生について、01, 18クラスの学生は同じクラスへ、それ以外は16, 17クラス(法営)と23クラス(現中)に割り振ることで対応したが、そのため、学生によっては、秋学期の受講クラスが適切なレベルでないことがあった。

この点については、表9に示されるように、TOEIC Bridge テストと Half TOEIC テストの相関が十分に高い( $r = .82$ )と考えられることから、例えば TOEIC Bridge テストで Half TOEIC テストのスコアを予測することが可能である。

表9 各テスト間の相関係数

	Bridge	Half	IP
TOEIC Bridge	—		
Half TOEIC	.82	—	
TOEIC IP	.77	.78	—

表10 Half TOEIC スコアを予測する TOEIC Bridge スコアの回帰分析

	<i>B</i>	<i>SE B</i>	$\beta$
TOEIC Bridge	0.48	0.01	0.82
切片	-13.25	1.4	

注.  $N=983, R^2=.67$

具体的には、表10に示される回帰分析の結果より、以下の式でHalf TOEICのスコアを予測することが可能である。

$$\text{Half TOEIC テストスコア} = 0.48 \times \text{TOEIC Bridge テストスコア} - 13.25$$

ただしこの計算式には当然誤差も生じるため、実際には、各クラスで受験を呼びかけたり、TOEIC IPテストなどステークスの高いテスト（スコアが手元に残り、履歴書にも記載できるもの）を実施するなど、未受験者を減らす工夫が必要であろう。

3点目として、入学者の英語力の経年変化や学習者の到達度を測定するために、今後も継続的にTOEICテストの受験を課す必要があることが指摘できる。本学の英語科カリキュラムやTOEICクラスの目標に鑑みても、またカリキュラムの客観的な評価・改善のためにも、複数回の受験サイクルを確立することが望ましい。

現行カリキュラムの中では、TOEIC科目と連動させながら1年次に2回（春学期期末・秋学期期末）TOEIC IPテストを実施すると、テスト形式にも慣れることができ、また半年ごとの学習成果を確認することができるだろう。加えて2年次以降の学生を対象として、春学期期末試験あるいは秋学期期末試験の時期にTOEIC IPテストを実施する。1年次生と同じ日時に実施できるこのタイミングならば、ある程度コストを抑えることが可能となり、またTOEIC科目が必修でなくなる2年次以降の継続的かつ自発的な学習への動機づけとなることが予想される。当然、実施のための費用負担などの問題についても考慮する必要があるが、3年次以降の就職活動の際に個人的に複数回受験する学生が多いことを考えても、また全学的な英語力の測定と教育効果の評価・改善のためにも、複数回の受験サイ

クルについてはぜひ前向きに検討していくことが望ましい。

4 点目として、英語科カリキュラムにおける到達目標と、その中での TOEIC クラスの位置づけを再考することの必要性が指摘できる。本稿の冒頭でも述べたように、入学生向けの履修要項には、TOEIC クラスの目標として、主として英語によるコミュニケーション能力の育成と、就職活動を見据えたスコアの向上 (TOEIC I : 450 点レベル, TOEIC II : 520 点レベル, TOEIC III : 620 点レベル) が挙げられている。しかし現実的には、TOEIC II の段階でこの目標に到達している学生は多くない。英語科目カリキュラム全体のバランスにも目を配りながら、各科目・クラスの到達目標の設定や方法論の改善、あるいは TOEIC クラス運営そのものの意義や目標スコアの適正化などを含め、再度担当教員間で共通認識をすり合わせていく必要がある。

2011 年度はちょうど新カリキュラム運用開始年度であり、また 2012 年度にはキャンパス移転が控えている。大きな変革の時期であることを鑑み、本稿のデータおよび分析をたたき台とした十分な議論がなされることが望まれる。

## 註

- 1 本学経済学部における取り組みについては三川・早川 (2006) を参照されたい。また、他大学の事例としては、広島大学外国語教育研究センターの一連の取り組み (榎田・前田・磯田・田頭, 2006, 2007, 2008, 2009) や TOEIC の分析を中心とした香川大学の報告 (長井, 2007, 2008, 2009) などがある。

## 引用文献

- 榎田一路・前田啓朗・磯田貴道・田頭憲二. (2006). 「広島大学キャンパス・ユビキタス・プロジェクトにかかる英語授業の実践 (その 1)」『広島大学外国語教育研究』9, 115-125.
- 榎田一路・前田啓朗・磯田貴道・田頭憲二. (2007). 「広島大学キャンパス・ユビキタス・プロジェクトにかかる英語授業の実践 (その 2)」『広島大学外国語教育研究』10, 85-95.
- 榎田一路・前田啓朗・磯田貴道・田頭憲二. (2008). 「広島大学キャンパス・ユビキタス・プロジェクトにかかる英語授業の実践 (その 3)」『広島大学外国語教育研究』11, 83-93.
- 榎田一路・前田啓朗・磯田貴道・田頭憲二. (2009). 「広島大学キャンパス・ユビキタス・プロジェクトにかかる英語授業の実践 (その 4)」『広島大学外国語教育研究』12, 95-104.
- 国際ビジネスコミュニケーション協会. (2006, May). 「TOEIC Bridge と TOEIC テストのスコア比較表」 Retrieved, January 27, 2011, from [http://www.toeic.or.jp/bridge/pdf/data/Comparison\\_BridgeandTOEIC.pdf](http://www.toeic.or.jp/bridge/pdf/data/Comparison_BridgeandTOEIC.pdf)

- 国際ビジネスコミュニケーション協会. (n.d.a). 「TOEIC公式ホームページ：TOEICテストとは」  
Retrieved, January 27, 2011, from <http://www.toeic.or.jp/toeic/about/what>
- 国際ビジネスコミュニケーション協会. (n.d.b). 「TOEIC公式ホームページ：TOEIC Bridgeとは」  
Retrieved, January 27, 2011, from <http://www.toeic.or.jp/bridge/about/what>
- 長井克己. (2007). 「香川大学における TOEIC テストの分析 (2005-2006 年度)」『香川大学教育研究』  
4, 40-52.
- 長井克己. (2008). 「香川大学における TOEIC テスト (2007-2008 年度) とアンケートの検討」『香川  
大学教育研究』5, 21-28.
- 長井克己. (2009). 「香川大学における 2008 年度 TOEIC テストと英語到達度別クラス編成の施行」『香  
川大学教育研究』6, 13-17.
- 前田啓朗. (2005). 「TOEIC Bridge テストと TOEIC テストを用いた英語力測定：到達目標型教育にお  
ける確かな英語力測定を目指して」『広島大学外国語教育研究』8, 109-116.
- 三川克俊・早川勇. (2006). 「愛知大学経済学部英語授業の改善—習熟度別クラス編成の 2005 年度実施  
と CALL 導入—」『愛知大学語学教育研究室紀要 言語と文化』14, 39-54.